



Data

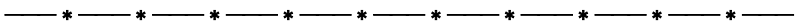
監督・脚本：ミカ・カウリスマキ
 出演：ヴェサ・マッティ・ロイリ/
 サムリ・エデルマン/マリ・
 ペランコスキ/ピーター・フ
 ランゼン/レア・マウラネン
 /イリナ・ビョルクランド

👁️👁️ みどころ

一人のもの(『モーターサイクル・ダイアリーズ』(04年))、女同士のもの(『テルマ&ルイズ』(91年))、男女4人もの(『サイドウェイ』(04年))等、「ロードムービー」の名作は多いが、そこに父子の名作が追加！

35年ぶりに現れ、「お前の父親だ」と言われても、息子は戸惑うばかり。しかし、フィンランドを南から北へ向かう「2人旅」の中で、音楽という共通のアイデンティティをもつ2人は「父子の絆」をしっかりと確認！

性格は正反対と思われた父子も、ラストでは完全な一体に。邦題のつけ方もピッタリの名作の誕生に拍手！



■□■本作には、音楽を通じた父子の絆が満載！■□■

スウェーデン、ノルウェーと並ぶ北欧諸国の一つ、フィンランドは日本には馴染みの薄い国だが、2013年にフィンランドで大ヒットしたロードムービーが日本でも公開。『北へ』という小林旭の名曲があったが、本作は南北に長いフィンランドを南のヘルシンキからずっと北へ進んでいくロードムービーだ。ストーリーは、コンサートピアニストとして大成功を収めている息子ティモ(サムリ・エデルマン)のもとを、35年間も音信不通だった父親レオ(ヴェサ・マッティ・ロイリ)が突然訪れてくるところから始まる。レオは、強引にティモを北への旅に連れ出そうとしたが、さてその狙いは？

酒を飲んで遊ぶことしかないようなレオに比べると、ティモの方は日々のピアノの練習はもちろん、コンサートの予定も入ってるから、そうそうレオの言うとおりに動けるわけではない。しかし「姉さんに会いたくないか？」と言われると、「え、俺に姉がいたの？」と聞き返さざるをえない。3歳の時に母親と死別したティモは、父親の顔も全然覚えてい

なかったが、自分に腹違いの姉がいると聞かされると、そりゃついて行かざるをえない。しかし、何ゴトも飄々と話すレオの話は、一体どこまでがホントで、どこまでがウソ・・・?

■□■同じ音楽家だが、この父子の性格は正反対！■□■

往々にして、息子は父親を「反面教師」として育つため、父子の性格が正反対というケースは多い。しかし、ティモはレオの生きざまはもちろん、生きているのか死んでいるのかすら全然知らなかったのだから、今スクリーン上に見るティモの性格がすべて父親と正反対というのは一体なぜ? 「フィンランドが誇る生きた国宝の一人」と言われるヴェサ・マッティ・ロイリは1945年1月生まれだから、私と4歳しか違わないが、その出っ張った腹と引きずっている足を見ればつい、「余命いくばく?」と思わざるをえない。レオ自身は、なぜ今ティモのもとを訪れたのかについて何も語らないが、多分レオ自身もそんな自覚があるのでは?

日本では山田洋次監督の『男はつらいよ』シリーズの主人公「フーテンの寅さん」こと車寅次郎が、国民の誰からも愛されるキャラだが、本作にみるレオもそれに近い。もっとも、寅さんはいくら貧乏でも人の道に反することは絶対にご法度だが、レオの方は北欧人らしく(?) そこらへんは大らかなようだ。明らかに偽造とわかるパスポートを持っているうえ、ストッキングを頭に被ってのコンビニ強盗がOKなら、レンタカーを針金で開けて勝手に借り出すのもOKらしい。それに対して、息子のティモの性格がきっちりしていることは、部屋の中の片づけぶり一つを見てもわかる。ところが、ティモの妻は? レオの



『旅人は夢を奏でる』 2014年1月11日(土)
配給: アルシネテラン

シアター・イメージフォーラム他にて全国順次公開
(C) Road North

そんな質問に対して、ティモは言葉を濁したが、翌朝ティモが出て行った後不動産会社と客がやってきたところを見ると、ティモは妻子が出て行ってしまったため部屋を売りに出しているらしい。さらに、レオが自らの体に注射している姿を見ると、レオが糖尿病患者であることがわかるが、本作中盤では実はティモも糖尿病患者であることが判明する。これを見ると、やっぱり父子は否が応でも遺伝するようだから、当初正反対に見えたレオとティモの性格も実は・・・。

■□■姉の秘密とは？祖母の秘密とは？■□■

ロードムービーには名作が多い。邦画の名作は何とんでも『幸福の黄色いハンカチ』（77年）だし、女2人の名作は『テルマ&ルイズ』（91年）。また、一人旅の名作は『モーターサイクル・ダイアリーズ』（04年）（『シネマルーム7』218頁参照）だし、男女2人ずつ4人の名作は『サイドウェイ』（04年）（『シネマルーム7』212頁参照）。さらに近時の名作には『リトル・ミス・サンシャイン』（06年）（『シネマルーム12』414頁参照）等があるが、本作によってそこに「父子の名作」が1本加わった。女同士でも男同士でも、また父子でも、2人のロードムービーの良いところは、24時間ずっと一緒に旅を続けながらさまざまな問題に直面すれば、良くも悪くも互いの本性が丸見えになってくることだ。

レオがティモを連れて最初に訪れたのは、母親違いの姉のミンナ（マリ・ペランコスキ）の家。ミンナとその夫ペルッティ（ピーター・フランゼン）は突然訪れてきたレオとティモに驚きながらも、それ相応の歓迎をしてくれたから、ティモも訪問のし甲斐があったというものだ。ところが、少し時間が経ち互いの本性が出始めると、糖尿病のため血糖値が高く、インシュリンがなくなるとすぐにカットとなるティモがペルッティの顔を殴ってしまうというトラブルが・・・。

次に、「ばあさんは生きてる」という言葉と共にレオがティモを連れて行ったのは祖母のところだったが、こんな風に昔をたどる旅を続けているとティモがいろいろと聞きたくなるのは、当然死んだ母親のこと。ところが、その話になるとレオは話をはぐらかすうえ、祖母の言っていることは自分の記憶と大きく食い違っていた。そこで「僕の本当の母親は別にいるの？」とレオを問い詰めると、いろいろな事情があってティモは養子に出された



『旅人は夢を奏でる』

2014年1月11日（土）シアター・イメージフォーラム他にて全国順次公開

配給：アルシネテラン

© Road North

らしい。すると、ティモが3歳の時に死亡した母親は養母であって、ティモには生みの母が別川にいるの？レオがティモを連れ回すロードムービーの過程の中でそんな「出生の秘密」がいろいろと明かされてくるが、本作を観ていると、そのリズムが良いためかあまり深刻さは感じられない。もっとも、当の本人はかなりショックを受けているはずだが、それだって次のシークエンスとなるモーターでの「ナンパ」ぶりを見ていると・・・。

■□■こんな芸があれば、ナンパなんてイチコロ・・・■□■

北欧は、フランスやイタリア以上に「性に対してだらか」というイメージがあるが、パンフレットの中にある渡辺芳子氏（北欧文化ジャーナリスト）のコラムを読むと、それがよくわかる。その中には、「ホテルで知り合った女性二人とベッドインするのもフィンランド的。いくつになっても男女間ではセックスがついてまわる。離婚、結婚を繰り返し、よりよい人生を求めながら、紆余曲折を繰り返すフィンランド人社会のあらゆる要素が満載だ。」と書かれている。問題のシークエンス(?)は、レオとティモがフィンランド・ホテルにチェックインしたところで登場する。ティモはナンパなどしたことがないはずだが、レオにとってそれはいつものことらしい。もっとも、母子連れの方もチェックインするレオとティモを意味あり気な目で見ていたから、最初から何らかの思惑が・・・。

ナンパの場所がラウンジになったのはごく自然だが、レオの殺し文句は「音楽がないな？」と、それに続く「ならば、俺たちでやろう」というもの。これはきっとハッキリだと考えた母親の方は「できない」方に10ドルと、母子間で賭けの対象にしたが、ステージに上がったレオがティモのピアノ伴奏でシャンソンの名曲『枯れ葉』を歌い始めると・・・。



『旅人は夢を奏でる』 配給：アルシネテラン (C) Road North
2014年1月11日 (出) シアター・イメージフォーラム他にて全国順次公開

れるの？ナンパという行為の中であったが、音楽を通じて互いの才能を確認し合うことができたレオとティモの父子には、めでたくベッドインした後にあっと驚くハプニングが・・・。



『旅人は夢を奏でる』 配給：アルシネテラン (C) Road North
2014年1月11日 (出) シアター・イメージフォーラム他にて全国順次公開

歌には自信がある私ですら、あの太鼓腹で死にかげの老人の体のどこからあんなに美しい声が出てくるのだろうかと感じたほどだから、この母子が膝を乗り出して聴き始めたのは当然。さらに、その美声に誘われるかのように、バンドがステージに加わる中、父子の共演による『枯れ葉』はクライマックスに・・・。

こんな芸があれば女をナンパすることなど簡単だが、あの太鼓腹で糖尿病の注射を欠かすことができないレオはベッドインに耐えら

コトが終わった後、禁煙を無視してタバコを吸ったため火災報知器が発動。高い罰金を取られるのを恐れて慌てて車に乗り込んだ2人が、無事ホテルから逃げ出すことができたのは幸いだったが、上着からまんまと財布がスラれていたから、ティモは真っ青。もつとも、そこでのレオの「俺たちも十分楽しんだろう」との言葉には何とも言えない説得力があったため、2人は大笑いすることに……。私は日本のテレビで連日放映されているアホバカバラエティーは大嫌いだが、本作にみるこんな笑いの取り方に大感激！

■□■過酷な現実の中でも、温かさでいっぱい！■□■

本作の英題は『ROAD NORTH』だが、邦題は『旅人は夢を奏でる』。こんな風に勝手に意味をつけられるとあまり良い邦題にならないのが普通だが、本作ではナンパのシーケンスからクライマックスに向けて、この邦題がいかにもピッタリだ。クライマックスの前にティモがレオに急かさされるかのように訪れるのが、別居中の妻ティーア（イリナ・ビョルクルンド）が一人娘と共に暮らしている家。どこかの男と一緒に暮らしているのでは？ティモがそう心配したのは当然だが、何ゴトも明るくしか物事を見ないレオは「絶対、そんなことはない」と断言し、塀から庭を覗いてみたが、やっぱりそこには男の姿が……。そんなシーンから始まる、ティモとティーアの「復活劇」のサマはほぼ想定どおりの展開だから、あなた自身の目でしっかりと確認し、2人に祝福の拍手を送ってほしい。

クライマックスに向けて意外な展開を見せるのは、レオがティモを生みの母親ピルッコ（レア・マウラネン）の家に連れて行くこと。レオとピルッコの間に35年前にはどんな出来ゴトがあったの……。？そして今、ピルッコは誰とどんな生活を送っているの……。？ここでストーリーは急にミステリー色を帯びた展開(?)を見せていくうえ、ピルッコの夫が銃を持ち出し、ティモに発砲してくるから怖い。レオとピルッコの話立ち聞きしたことによって、ティモは自分がいかに過酷な状況下で生まれてきたかを思い知らされることになったから、そのショックは大きいはず。さらに、銃で撃たれた傷はかすり傷だと言っていたが、いざレオの傷口を見てみると全然違っていたから、ティモのショックはさらに増幅。しかし、ここでもまた、レオの陽気さや人の良さが残っているうえ、レオはティモの所に戻ってきてやるべきことをすべてやり遂げたという満足感があるから、その話しぶりには暗さが全くない。まさに「旅人は夢を奏でる」という邦題ピッタリのエンディングになっていく。したがって、父子2人のロードムービーの中でさまざまな出生の秘密を知らされたうえ、クライマックスでは何とも過酷な現実を知らされたティモだったが、最後には私を含めてすべての観客は温かさでいっぱい！



『旅人は夢を奏でる』 監給：アルシネテラン (C) Road North
2014年1月11日 (出) シアター・イメージフォーラム他にて全国順次公開

レオの人生は聖人君子とは程遠いものだし、決して褒められたものではないが、それでも、この父子のロードムービーによってティモが得たものはメチャ大きかったはずだ。本作を観て、映画ってホントにいいものだなということ、改めて痛感！

2014 (平成26) 年3月11日記